

## 動物の魂 天使の心

ガザーリー (Al-Ghazzali) 著 『幸福の錬金術』の研究

ウルズラ・リュットン

「人間は戯れに創られたものでもなければ、偶然によるものでもない。それは、まさに奇跡であって、何か大きな目的のもとに創られているのだ。このことを心得ておくように。」 Al-Ghazzali

### 序

イスラムの思想家であり、神学者でもあったガザーリー (Al-Ghazzali, 1058-1111) はペルシアの都城メシェドで生まれ、11世紀の後半を生き抜いた人である。まさに、その世紀は、地中海、および小アジアを中心とした地域での文化的・知的交流が盛んに行われていた時代であった。ガザーリー自身もまた、イスラム教 コーランの教え にギリシア哲学の思弁的な手法を結びつけようとする試みを熱心に行った。というよりもむしろ、当時の彼が知りえた哲学の中でもとりわけ卓越した知見をイスラム思想と統合しようとしたのであった。

このような試みが起こる背景には、知的・理性的な側面からイスラム教神学を構築していくことができなかつたという当時の学問状況があった。こういった状況を打破するために、ガザーリーは彼のもっとも著名な論考である『宗教学の復権 (Ihya-ul-ulum ad-din)』をアラビア語で著した。この著作は、さらに多くの人々に読まれるよう、また研究されることを目的として、ガザーリー自らがペルシア語の簡略版 『幸福の錬金術 (Kimiya'e saadat)』と命名される を編集したのである。

ガザーリーの思想と彼の著作『幸福の錬金術』の根底をなす考えは、人間には根本的に異なる性質を持つ2つのものが備わっている、ということである。ひとつは「物体」としての性質を有するもの 卑しく現世的なものでもある であり、そして、もうひとつは「精神」としての性質を有するもの 気高く神聖なもの である。

この人間を特徴づける2つの特質は常に対照的である。したがって、自らの人格を形成していく過程において要求される条件とは、常に自分自身をよく観察し、そのことを通じて人間が持っている現世的要素 肉体面、物体面の要素 の特質をしっかりと吟味していくということである。こういった考察をなすことで、人間の肉体的・物質的側面は大体において、動物の習性に広く見られるような行動と同じであることが理解される。つまり、そういった行動は、この世的で感覚的な領域に関係がある。しかし、人が人間だけに特有の能力に向かって努力し、肉体面の欲望に密接に関連する欲望を断ち切ることで、人の精神的側面が成長し、そして、天使の持つ特性を獲得することができるようになるのだ。

喜怒哀楽に支配されるのではなく、真善美という神々しい世界の観照にひたることの充足感を見いだすのである。

とは言うものの、肉体的・物質的、つまり、動物的な側面から、人の精神の崇高さを求めて、精神的、つまり、天使的な側面へと移り変わっていくことは容易なことではない。そこで、まさにこの点を支援する目的で、ガザリーはこの変化に必要な段階を簡単な言葉で次のように書き記したのである。

- 1．己を知ること
- 2．神を知ること
- 3．現世をありのままに知ること
- 4．来世をありのままに知ること

ここでは、ここに挙げた4つの要素のうち、第1番目の要素、すなわち「己を知ること」に焦点を当てて考察を加えてみようと思う。この要素は、動物の魂と天使の心との相違を強調しているからである。

#### 知覚のレベル

ガザリーの手法を理解するために、彼が用いた知覚の分類を考察する必要がある。ガザリーは、人間の知覚のレベルを5つの段階に区分し、それぞれが人間の精神を扱う手法となっている。

- ・ 感覚的精神 (sensory spirit) は、感覚器官 目 (見るため)、耳 (聞くため) 鼻 (匂うため)、口 (味わうため)、および体全体 (触れるため) による知覚に関与する。
- ・ 想像的精神 (imaginative spirit) は、感覚器官を通じて知覚された情報を管理する役割を担う。この精神の特質のひとつに、その精神が地上に存在するすべてのものと同じ物質からなっているということがある。というのも、知覚の対象となるすべてのものは、その大きさと形で 言い換えれば「物体 (bodies)」として明確に規定されているからである。さらに、観察する側 (主体) と、される側 (客体) との間の空間的距離は重要な意味を持っている。
- ・ 知的精神 (intelligential spirit) は、感覚器官を通じて知覚されたものを把握することをめざすと同時に、神の御心を認知する基礎としての役割を担う。
- ・ 論理的な精神 (ratiocinative spirit) は、ひとつの視点から考える力を与えてくれる。そして、その出発点から、さらに深い着想や思考を多く生み出すのである。最終的には、この精神により、我々はある種の結論へと導かれ、そこからさらに突っ

込んだ結論を目指していくのだ。この精神の働きにより、我々は将来に向けた備えや計画を立てることができる。

- ・ 超越的、すなわち預言者的精神（transcendental, prophetic spirit）とは、預言者と同じく聖人が持つ精神である。この精神は、異なる2つの部分に分けることができ、そのひとつは外部の教えや助言に従うものである。残りのひとつは、それ自身が明々白々なものであり、外からは何も必要としていないかのようである。

資料：ガザリー「光の場」『4つのスーフィー古典』

（The Octagon Press, London, 1980）

## 己を知ること

「ガザリーによれば、教育が真にめざすものは、単に情報を与えるというだけのことではない。むしろ、内面の意識を刺激することである」  
Idries Shah

己を知ることの探求　幸福の錬金術はまずここにはじまる。この探求は次のような問いかけからなり、そして我々の論理の精神が呼び起こされるのである。その問いかけとは、

自分はいったい何ものか？そして、どこから来たのか。

どこに向かって進んでいるのか？そして、ほんのつかの間でもこの地上に生きている証は何か？

幸福や不幸は何に由来するのか？

こういった疑問にしかるべき答えを与えることが必要なのである。

動物の行動パターンをよく観察すると簡単に分かるのだが、動物は種の保存と生命の維持　食べる、寝る、戦う　に終始している。人間も、比較的低いレベルの活動、つまり肉体的な活動をするときには、さして動物とは異なるものではない。このレベルでは、人間も動物も同じような活動をしているからである。しかし、人間には理性がある。この理性により、空間や時間、そして日常的なもろもろの物理的な障壁を乗り越えることができ、また人生の本当の意味を明らかになるのだ。理性を使うことで、自分の持つより高次の能力や、自分の生まれ持った立場を見出そうとすれば、誰であれ、動物の本能や物質的な欲から解放されるであろう。それどころか、天使的な特質を身につけ、真善美という神々しい世界を觀照する能力を与えられるであろう。そうすることで、人は、喜怒哀楽や物欲と密接に関係するさまざま精神的なプレッシャーからも解放されるのである。

まず最初に認めなくてはならないことは、人間には外面（体）と内面（心）があるということだ。ここで言う「心（heart）」とは、人間の内面的実体、すなわち「精神」のことであり、臓器のひとつである「心臓」を指すものではない。人間の内面にある心（精

神)は、そもそも目に見えない世界に属すものであるが、さしあたりこの現実世界に入り込んでしまっているのだ。それは、あたかも外国商人　　はるか遠く離れた異国の地に商売に来ているものの、いずれは故郷へと戻っていく　　のようなものである。人間の、この内なる要素、すなわち精神的な要素を研究することこそ、己を知り、そして、究極的には神をも知ることへの鍵となるのである。

人間に存在する動物的な側面に対して、精神的(天使的)な側面からの戦いでは、「肉体」が領地で「精神」がその領地を支配する統治者、そして「五感」が軍団を構成するものとたとえることができよう。この場合、軍団を指揮する将軍の地位は「理性」が占め、万事正しくことが運ぶように適切な命令を与えるのだ。重要なことは、精神がより低いレベルの能力、つまり感覚的能力を管理することであり、肉体的な欲望　　人間を欲望から快樂へ、そしてまた快樂から欲望へと引きずり回すもの　　で人間が支配されないようにすることである。人間の持つ天使的な性質と同じく、凶暴的で動物的な側面を育成し強化していくことで、調和した特質を生み出すこととなる。その特性は、審判の日において、目に見えるかたちで明らかにされ、しかるべく裁かれることであろう。

しかし、疑問が残る。人間は一方では動物的な特質も備えていながら、天使的な機能こそが人間の本質的な部分であることということを、いったいどのような方法で知りえるのであろうか。この問に対する答えは、まさに次の事実の中に見つけることができる。それは、それぞれの創造物の本質はその最高次の資質の中に見出せるということだ。そして、人間の場合、その最高次の資質とは、まさに理性なのである。理性こそが、人間を明らかに動物と区別する、まさにその機能を象徴するものである。こういった精神の特性をはぐくみ、肉体よりも精神が打ち勝つ人間となって死を迎えることになれば、人は理性のない感情や憤りへとつながるものをすべて捨て去り、天使の仲間入りをするようになるのである。すべての生きとし生けるものは、それぞれのもっとも難しいとされる問題を解決することの中に、もっとも大きな充足感を見いだすものなのだ。これは、肉体的な側面にも、また、精神的な領域にも当てはめることができる。それが、山登りであれ、一局のチェスであれ、込み入った数学の問題であれ、解決策を見出したとき、人は幸せを感じるのである。しかしながら、精神的な面でもっとも難しい課題は、真実を突き止めることである。物質的なものは時間の制限内に閉じ込められているが、精神的なるものは時間を超越したものである。死という肉体的時間の終わりとともに、肉体の感覚的な欲求も消え去ってしまうものなのである。しかし、精神は死に絶えることはない。そして、精神が、肉体の制約を受けながらも、その存命中に得たまさにその知識は維持されるのだ。

人間の肉体面の研究から、人間存在の秘密を明らかにすることができるかもしれない。しかし、結局は、精神こそが、己を知り、神を知ることについて肉体よりもはるかに大きな役割を演じているのである。この現実世界の中では、人間は弱い存在である。そして、さまざまな類の障害や制約を受けている。かくして、真の価値というものは、来世

にこそ求められるものなのであろう。そのための前提となるのが「幸福の錬金術」の発見であり、そのことで人は動物の位から、天使の高みへと上ることができるのである。

資料：ガザリー『幸福の錬金術』（The Octagon Press, London, 1980）